

# 旅するシンフォニー

～ドヴォルザークの交響曲第9番〈新世界から〉を巡って

飯尾洋一



ドヴォルザークが長年過ごしたプラハの街並み

## 家路

——いったいどこに帰るのか？

これほど「歌われている」交響曲はないのではないか。ドヴォルザークの交響曲第9番〈新世界から〉第2楽章「ラルゴ」を耳にすると、つい歌詞を添えて口ずさみたくなる。まるで民謡のように自然で、郷愁を誘うメロディだ。

多くの日本人は、この「ラルゴ」を歌詞付きで歌ったことがあるはず。さて、どんな歌詞だったろうか。おそらく、堀内敬三の詞による「遠き山に

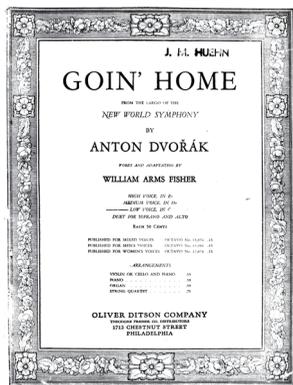
日は落ちて」（「家路」）を思い出す方が多いのではないか。いかにもキャンプファイヤーなどにぴったりの訳題である。あまりこの曲の歌詞を意識することはなかったが、改めて詞を読むと、一日の終わりにくつろぐ様子が歌われており、仕事や学校の帰りにもよくなじむ歌詞だと感じる。

しかし、この曲に歌詞を添えたのは堀内敬三だけではない。野上彰作詞による「家路」をご存知の方もいらっしゃるだろう。その歌い出しは、「響きわたる 鐘の音に／小屋に帰る 羊た

ち」。こちらは歌詞の上で「ゴ〜〜ン！」といきなり鐘の音が鳴っている。1番の歌詞で思い出に浸る様子が歌われ、2番の歌詞では待ちわびる老親の家を訪ねるとあって、どうやらここで歌われているのは日常的な帰り道などではなく、久しぶりに故郷に帰るといふ心揺さぶる人生の特別イベントなのだ。これも「家路」には違いないが、堀内敬三の詞とはかなりテイストが異なる。

では、どうしてドヴォルザークの〈新世界から〉が、日本では「家路」になってしまったのか。そんな疑問もわく。実は前述の二つ以外にも、多数のバージョンの日本語訳詞による「家路」が存在する。このメロディには、日本人のノスタルジーを喚起する特別なにかが含まれているのだろうか。

そう考えたくなくなってしまうのだが、実際にはこの曲は日本に入ってくるよりもっと前から「家路」だった。ドヴォルザークがアメリカ時代に教えた弟子の作曲家ウィリアム・フィッシャーが、



フィッシャー「Goin' Home」の楽譜の表紙

1922年



アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904)

にこの曲に「Goin' Home」という歌詞を付けて出版しているのだ。これが「家路」と訳されたと考えるのは自然なことだろう。もとより、郷愁を誘うメロディだ。おまけにアメリカに渡ったドヴォルザークが望郷の念にかられていたことを思えば、弟子が「Goin' Home」という歌詞を添えたことにも納得がゆく。

ところが、フィッシャーの「Goin' Home」の歌詞を見ると、ここで描かれる故郷は堀内敬三の詞とも野上彰の詞とも意味合いが異なることに気づく。この詞における故郷とは、「母が待ち、父が待ち、みんなが待っている場所」であり、「失うものはなにもなくすべてを得られ」「悩みも苦しみもない」永遠の故郷だといふのである。つまり、現世との別れの歌なのだ。

そう考えると、「家路」がたどり着く先はフィッシャー、野上彰、堀内敬三



ニューヨーク到着後のドヴォルザーク (右端)

近所に帰るのが堀内敬三の詞だ。

今や「家路」には、デパートなど商業施設の閉店の音楽や、学校の下校の音楽としての印象も強い。これ以上ないほど、日常的な帰宅の音楽になっている。ドヴォルザークがプラハからニューヨークへと船で渡るためには10日間以上を要したことを思えば、ジェット機時代の「家路」がずいぶん近くなっても不思議はないのかもしれない。

## 爆走するオーケストラ

ドヴォルザークの〈新世界から〉で、もう一つ気になるのは、「鉄道」モチーフだろう。ドヴォルザークは非常に熱心な鉄道ファンだった。蒸気機関車に魅せられて、駅を訪ねてはその様子を何時間も眺め、列車の時刻表から運転手の名前まで暗記していたという。今風にいえば、なかなか「鉄分が高

で、ずいぶん違いがある。いちばん遠くに帰るのがフィッシャーの詞、いちばん

い。

作曲者自身がそう明示しているわけではないにせよ、〈新世界から〉第4楽章はそんな作曲者の鉄道趣味のあらわれと解釈することができる。冒頭は発車する蒸気機関車が次第に速度を増していくようだ。車体が爆走する重量感がとてもよく伝わってくる。続く決然とした主題も旅のはじまりにふさわしく、実にドラマティックだ。

鉄道名曲といえば、ドヴォルザークよりもぐっと描写的に蒸気機関車を表現したオネゲルの交響的楽章〈パシフィック231〉や、アルカンのピアノ曲〈鉄道〉といった作品も後に書かれている。〈新世界から〉は彼らの先輩格といってもいいだろう。

第4楽章には全曲でただ一度、シンバルが登場する場面がある。「シャー」とささやかにシンバルが打ち鳴らされるのを境に、曲は夢見るような曲調に一変する。きっとこのシンバルは現実と空想シーンを切り替える合図のような意味合いの音だろうと長らく理解していたのだが、ある鉄道ファンの方が「いや、あれは列車の連結音にちがいない」と指摘してくれた。な、なるほど……。ずいぶん即物的な描写ではあるが、たしかに筋は通っている。

もっとも、蒸気機関車の連結音は聞いたことがないのだけれど。

(いお よういち・音楽ライター)

心に残るクラシック

## ヤマザキマリ——①

Mari Yamazaki

## 音楽妄想画法

## ボロディン：〈イーゴリ公〉“だったん人の踊り”



©川上尚見

私の母はオーケストラのヴィオラ奏者だった。夫と死別してシングルマザーになった後も、夜が遅くなる演奏会の日には娘二人をコンサート会場に連れて行くこともしばしばあった。楽屋で待たせる場合もあるけれど、たいていはステージからもよく見える、客席の最前列のど真ん中に娘たちを座らせ、演奏しながら時々こちらをちらりと監視する。曲目がつまらない時など、どうしても途中でぞもぞと動き始めてしまうわけだが、そんな時はステージから演奏中の母が、鋭い眼光でこちらをカッと睨みつけるのだ。真剣に演奏をしている大勢の団員の中で母だけが指揮棒ではなく、私達を見つめているその有様は、子供心に大いなる緊張感をもたらすものがあった。そんな危険信号が出た時は、即座に私も妹も椅子にじっとおさまり、楽曲が終わるまでの時間を静かに耐え抜くしかない。シベリウスであろうとメシアンで

あろうと、母が指揮者に怒られたり団員から<sup>ひんしゅく</sup>響感を買うようなことになってはいけなと、身動きもせずじっとシートに座り続けるのである。実はこの経験のおかげで、私はとあるスキルを身につけた。どんなつまらない曲でも、それをBGMにしたお話を想像する。そうしていると、長丁場でもなかなか楽しく過ごせるのである。

さすがに私が就学した後は、本番の日は家で留守番をすることも多くなったが、それでも時々母は「今度やるのは面白い曲だから、あんたたちも来たほうがいいよ」と私達を演奏会場へ連れて行くことがあった。確かに母が薦める曲は子供でも楽しめるものが多かったし、私はそれらの音楽に耳を傾けながら、いつものように頭の中で様々な妄想をどんどん膨らませるのである。

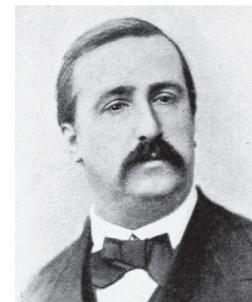
そんな生演奏で聞かされたたくさんの曲の中には、今でも作画の時に聴くものがいくつかある。そのうちの一つ

がアレクサンドル・ボロディンの〈イーゴリ公〉第二幕の名曲“だったん人の踊り”である。私が初めて音楽から得たイメージを絵で表したのも、この“だったん人の踊り”だった。美しい旋律と躍動感に満ちたこの曲のタイトルである〈イーゴリ公〉が、いったいどんな話なのか母に聞いてみたが、「公爵様の冒険物語よ」というような短い答えしか戻ってこず、私は自分の妄想のみで、広い野原を馬に乗って走る王子様の絵を描いた。動物を描くのが大好きだったので、どちらかと言えば王子様ではなく馬の描写に力が入った絵だったが、そこからさらに物語が奥に向かって広がっていくのである。私は新聞の折り込みチラシの裏に、草原に行く馬と王子様のイメージ画像をどんどん描いて、そこに汚い文字で物語を書き込んだ。

“だったん人の踊り”で実践したこの音楽妄想画法は癖になり、私はその後、随分様々なジャンルの曲を聴いては、頭の中に浮かぶ画像や物語をキャンバスや紙の上で表現し続けてきた。私の作品は音楽の効果によって作られたものが殆どなのである。

しかし、実はこの音楽妄想のせいで、ちょっとした失敗をしたこともある。フィレンツェの美術学校に通っていたころ、街の店に美しい絨毯が飾られているのを見かけた。外に出て来

た店長のペルシャ人のおじさんに誘われて店内に入ると、なんとその時の店内のBGMは“だったん人の踊り”



ボロディン(1833~87)

だったのである。おじさんは音楽が流れる中で、その絨毯が織られた地域についての描写をぺらぺらと語り始めた。とたんに私の頭の中には、行ったこともないそのペルシャの村のエキゾチックな情景が広がった。広大な草原、地平線まで赤く染まるドラマチックな夕焼け。民族衣装に身を包みながら踊る美しい娘たちと、乗馬の上手い男たち。当時の私は明日食べるのにも事欠くくらい貧乏だったので、気がついてみると月賦でその絨毯を購入していたのである。最終的に自分のものにはなったのだから失敗とは言えないのだけど、“だったん人の踊り”を聞くと、今の私にはどうもあのフィレンツェの絨毯屋と話の上手い店長の顔が思い出されてしまうのであった。

profile やまざき・まり

漫画家・随筆家。1967年東京都出身。国立フィレンツェ・アカデミア美術学院で油絵と美術史を専攻。『テルマエ・ロマエ』で第3回マンガ大賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞受賞。エジプト、シリア、ポルトガル、米国を経て現在はイタリア在住。平成27年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞。平成29年イタリア共和国星勲章コメンダトーレ勲章。

◎首席コントラバス奏者

## 大槻 健

Ken Otsuki

### 読響最年少の首席 音作りにこだわりたいです

「まずコントラバスの魅力を教えていただけますか」

コントラバスは、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロと、だんだん大きくなっていった楽器と思われがちですが、実はコントラバスだけヴィオローネという楽器が先祖で、ギターやリュートと同じ系統なんです。コントラバスは本番の出来を大きく左右する楽器だと自負していますし、最も音楽的でないといけません。特に、ドイツの曲は低音を重要視し、チェロ・コントラバスを中心に作られているものが多いと思います。明るい曲調から重厚感あふれるものまで、コントラバスの音色で曲の情景を表現したり引き出したりしていきます。また、グルーブ感というか、会場の空気感を音で作れるのです。

「奈良県出身の23歳。9歳からチェロを始め、中学校入学とともにコントラバスに転向。Rubato Strings主催の第2回日本国際コントラバス・

コンクール第1位。東京芸術大学在学中から国内のオーケストラの客演首席奏者を務め、今年4月に読響に入団」

祖父と父が趣味でチェロを弾いていたこともあって、9歳の時に、「チェロをやりたい」と両親にせがみました。とはいえ、習う先生の当では全くありません。インターネットでスクールを探し、週1回のレッスンを開始。音楽を楽しく教えていただき、結局高校2年まで続けられました。

中学入学と同時に吹奏楽部に入部。メロディーが多くてよく目立つのでクラリネットを希望しましたが、チェロを弾いていたことからコントラバスを薦められ、これが大きな転機となりました。クラリネットでプロを目指していたという高校の吹奏楽部顧問が、講師にプロのコントラバス奏者・林武寛先生を呼んでくださり、先生の弾く素晴らしい音、音楽的な知識などがその後の人生に影響したと思っています。進路を決めなければならない高校2年の秋に、音楽で生きていこうと決断。林先生のご自宅がある兵庫までレッスンに通いました。両親を説得するのは難しかったですが、国内の主要オーケストラの雇用条件や収入、活動内容などを調べて「ここに入れば大丈夫」と



説得し、東京芸術大学に進学しました。

周りの音楽レベルは高かったですね。同級生には、今月の《三大協奏曲》に出演するヴァイオリンの岡本誠司さんや、小林壱成さん、チェロの岡本侑也さんなどスタープレーヤーも多く、演奏技術や音楽的なコミュニケーション能力をお互いに高め合うことができました。中でも印象深いのは、池松宏先生の言葉です。「ヴァイオリンが演奏に入る瞬間の弓の毛の音を聴け」。常に一緒に演奏する人を考え、時にリードし時に支えることが、コントラバスに求められている役割の一つだと考えています。都内の三つのオーケストラの首席オーディションを受験予定でしたが、最初に受けた読響に合格できました。

「詩人で小説家の島崎藤村の子孫と聞きました」

父の母親の家系が島崎で、つまり祖母のおじいちゃんが島崎藤村です。小さいころ学校の教科書に出ているのにびっくりしたぐらいで、特に意識をしたことはありませんが、藤村の詩はリズムがよく、心地のよい韻は音楽に通ずるような気がしています。親戚も含めて、フルート奏者やヴィオラ奏者、画家など芸術家も多いのですよ。

「読響には首席として入団しました。今後の目標などはありますか」

学生時代から他の楽団ではエキストラとして首席も務めてきました。首席はまさしくかじ取り役。譜面に書いてはありませんが、車のアクセルとブレーキのように、どっちに行こうかという場面が必ずあり、それを導いていく役割も大変面白いと思っています。皆さん協力的で、かえって一番若いのが良いのかもしれない。失敗しても素直に謝り、日々糧にしています。

草津音楽祭で、コントラバスの世界的巨匠で、元ベルリン・フィル首席奏者のクラウス・シュトール氏のレッスンを受けました。彼の音はとても優しく、天から降ってくるような衝撃的なものでした。ホールを包み込むような、空間そのものを作り出すような色や温度のある音を出していきたい。そして、伝統のある読響の音に加えて、新しい読響のコントラバス・セクションの音を作っていくことが今の目標です。

新鋭バ스티アンのタクトが生む華麗なる〈ボレロ〉

9/5 (水) 19:00 第21回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール (大阪)

9/6 (木) 19:00 名曲シリーズ 福岡公演  
アクロス福岡シンフォニーホール



ジョセフ・バスティアン

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉  
チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲  
ドビュッシー：交響詩〈海〉 ラヴェル：ボレロ

指揮：ジョセフ・バスティアン ヴァイオリン：神尾真由子

“色彩の魔術師”カンブルランの《チャイコフスキー名曲選》

9/15 (土) 14:00 第210回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

9/16 (日) 14:00 第210回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール



シルヴァン・カンブルラン

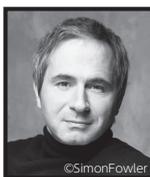
チャイコフスキー：幻想序曲〈テンペスト〉、  
ロココ風の主題による変奏曲、交響曲 第4番

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) チェロ：アンドレイ・イオニーツァ

カンブルランが鮮やかに描くブルックナー〈ロマンティック〉

9/21 (金) 19:00 第615回 名曲シリーズ  
サントリーホール

9/23 (日) 14:00 第106回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール



ピョートル・アンデルシェフスキ

モーツァルト：歌劇〈後宮からの誘拐〉序曲、ピアノ協奏曲 第24番  
ブルックナー：交響曲 第4番〈ロマンティック〉(1888年・第3稿/2004年刊コーストヴェット校訂版)

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ピアノ：ピョートル・アンデルシェフスキ

音楽の力とは？カンブルランが届ける未来への熱いメッセージ

9/28 (金) 19:00 第581回 定期演奏会  
サントリーホール



諏訪内晶子

ペンデレツキ：広島に犠牲者に捧げる哀歌  
シマノフスキー：ヴァイオリン協奏曲 第1番  
ハース：静物 ラヴェル：ラ・ヴァルス

指揮：シルヴァン・カンブルラン (常任指揮者) ヴァイオリン：諏訪内晶子

9月 公演の聴きどころ

9月5日《大阪定期》、6日《福岡公演》は、フランス出身の新鋭バスティアンが読響に初登場。2016年にドイツの名門、バイエルン放送響でセンセーショナルなデビューを飾って以来躍進する注目株だ。得意のフランス音楽から〈海〉や〈ボレロ〉などの名曲を輝かしく響かせる。また、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲では、チャイコフスキー国際コンクールで優勝し、巨匠メータの指揮でミュンヘン・フィルなどと共演した実力派、神尾真由子が超絶技巧と豊かな音楽性を発揮する。

9月後半は、常任指揮者のカンブルランが3プログラムを披露する。《土曜・日曜マチネー》は、オール・チャイコフスキー・プログラム。〈ロココ風の主題による変奏曲〉では、2015年のチャイコフスキー国際コンクールを制したイオニーツァを独奏に迎える。後半は、力強いファンファーレと民俗的なリズム、哀愁漂う旋律で人気の交響曲第4番。カンブルランが、鮮烈な切り口で作品の奥深さを満喫させてくれるだろう。

21日《名曲》、23日《みなとみらいホリデー名曲》はブルックナーの傑作、交響曲第4番〈ロマンティック〉を核にしたドイツ系プログラム。旧来のブルックナー解釈を打ち破る鮮やかなアプローチに期待が高まる。前半は、円熟を増すポーランドの名匠アンデルシェフスキが、モーツァルトのピアノ協奏曲で独特の世界観を表現し聴衆を魅了するだろう。

28日《定期》は、「死と破滅」というテーマを色濃く打ち出すプログラム。ラヴェル〈ラ・ヴァルス〉をメインに、ペンデレツキ、G. F. ハースの作品で同時代へ眼差しを注ぐ。また、シマノフスキーのヴァイオリン協奏曲第1番では、世界的ヴァイオリニストの諏訪内晶子が共演し、幻想的な世界を作る。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

古楽界の鬼才アントニーニが初登場。女王ムローヴァが共演!

10/16 (火) 19:00 第616回 名曲シリーズ  
サントリーホール

ハイドン：歌劇〈無人島〉序曲  
ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲  
ベートーヴェン：交響曲 第2番

指揮：ジョヴァンニ・アントニーニ ヴァイオリン：ヴィクトリア・ムローヴァ



©Henry Fall  
ヴィクトリア・ムローヴァ

アントニーニが自らリコーダーも披露し、名人アヴィタルが魅せる

10/20 (土) 14:00 第211回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

10/21 (日) 14:00 第211回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ヴィヴァルディ：ドレスデンの楽団のための協奏曲

ヴィヴァルディ：マンドリン協奏曲

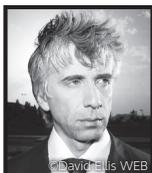
J. S. バッハ：マンドリン協奏曲

ヴィヴァルディ：リコーダー協奏曲

ハイドン：交響曲 第100番〈軍隊〉

指揮&リコーダー：ジョヴァンニ・アントニーニ

マンドリン：アヴィ・アヴィタル



©David Ellis WEB  
ジョヴァンニ・アントニーニ



アヴィ・アヴィタル

日下紗矢子ら読響メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル

10/22 (月) 19:30 第19回 読響アンサンブル・コンサート  
よみうり大手町ホール ※19:00開演 読響解説

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

J. S. バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第5番

バルトーク：弦楽のためのディヴェルティメントほか

ヴァイオリン：日下紗矢子（読響特別客演コンサートマスター） チェンバロ：北谷直樹



日下紗矢子

鈴木雅明&世界最高峰のRIAS室内合唱団による極上の響き

10/26 (金) 19:00 第582回 定期演奏会  
サントリーホール

J. M. クラウス：教会のためのシンフォニア

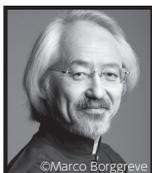
モーツァルト：交響曲 第39番

メンデルスゾーン：オラトリオ〈キリスト〉

メンデルスゾーン：詩篇第42番〈鹿が谷の水を慕うように〉

指揮：鈴木雅明 ソプラノ：リディア・トイシャー

テノール：櫻田 亮 合唱：RIAS室内合唱団



©Marco Borggreve  
鈴木雅明

名匠デイヴィスがシベリウスの名曲で熱いタクトを振る!

11/23 (金) 14:00 第107回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール

ニールセン：歌劇〈仮面舞踏会〉序曲

エルガー：チェロ協奏曲

シベリウス：交響曲 第1番

指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス

チェロ：ハリエット・クリーフ



©Dennis Russell Davies  
デニス・ラッセル・デイヴィス



©Nancy Horowitz  
ハリエット・クリーフ

ジャズの要素がふんだんに盛り込まれたアダムズの衝撃作

11/28 (水) 19:00 第583回 定期演奏会  
サントリーホール

スクロヴァチェフスキ：ミュージック・アット・ナイト

モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲

アダムズ：シティ・ノワール

指揮：デニス・ラッセル・デイヴィス

フルート：エマニュエル・パユ

ハープ：マリー＝ピエール・ラングラメ



©Daniel Fochler (Kensho) / EM Classics  
エマニュエル・パユ



©Kevin Lowery  
マリー＝ピエール・ラングラメ

お申し込み・  
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390

(10:00~18:00/年中無休)

ホームページアドレス <https://yomikyo.or.jp/>

### 1回券料金表

定期・名曲・みなとみらい	S ¥7,500	A ¥6,500	B ¥5,500	C ¥4,000
定期 (10/26公演)	S ¥9,500	A ¥7,500	B ¥6,000	C ¥4,500
マチネー	S ¥7,500	A ¥5,500	B ¥4,500	C ¥4,000
大阪定期	BOX ¥8,500	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,100
福岡公演	S ¥6,100	A ¥5,100	B ¥4,000	

## 読売日本交響楽団 佐世保公演

■ 9/7 (金) 19:00 アルカスSASEBO (長崎県佐世保市)

## スターピアくだまつ名曲シリーズ XV 読売日本交響楽団演奏会

■ 9/8 (土) 18:30 スターピアくだまつ(山口県下松市)

指揮：ジョセフ・バスティアン

ヴァイオリン：神尾真由子

ベルリオーズ：序曲〈ローマの謝肉祭〉

チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲

ドビュッシー：交響詩〈海〉

ラヴェル：ボレロ

[料金] S ¥6,500 A ¥5,500 B ¥4,500 学生 ¥1,000 (9/7)

S ¥4,800 A ¥4,300 学生 ¥2,000 (9/8)

[お問い合わせ] アルカス SASEBO 0956-42-1111 (第2・4水曜日を除く)

スターピアくだまつ 0833-41-6800

## 井上道義&読売日本交響楽団 マーラー〈千人の交響曲〉

■ 10/3 (水) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：井上道義

ソプラノⅠ (いと罪深き女)：菅英三子

ソプラノⅡ (贖罪の女)：小川里美

ソプラノⅢ (栄光の聖母)：森麻季

アルトⅠ (サマリアの女)：池田香織

アルトⅡ (エジプトのマリア)：福原寿美枝

テノール (マリア崇拜の博士)：フセヴォロド・グリフノフ

バリトン (法悦の教父)：青戸知

バス (瞑想する教父)：ステイーヴン・リチャードソン

首都圏音楽大学合同コーラス、TOKYO FM 少年合唱団

マーラー：交響曲 第8番〈千人の交響曲〉

[料金] S ¥7,000 A ¥6,000 B ¥5,000 C ¥4,000 D ¥3,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス

0570-010-296 (休館日を除く10~19時)